



久保田信

57

ウリクラゲ



冬季、京都大学瀬戸臨海実験所の北浜にまれに打ち上げ

るクラゲの一つがウリクラゲ。体長は10センチ前後の大きめの個体。瀬戸漁港でも見つかるが、ここでも希少だ。

ウリクラゲの特徴は、なんといっても体中を巡る栄養輸送用の管がメロンのネットのように複雑に分岐していることだ。画像では赤いギザギザの所。鉢クラゲ類ほど体は大きくならないが、多岐に分岐した管を体に張り巡らしているのは共通している。こんなに複雑な構造をしているのも、傷つけばすぐに元通りに戻す強い再生力がある。

もう一つの特徴は、一生涯、触手を持たないことだ。8列の櫛板(くしいた)を持つクシクラゲ類の仲間「無触手類」に属する。しっかりした体をしていて薬品固定も容易であり、長持ちする標本として何十年も使える。

生きているウリクラゲは非常に美しい。クシクラゲ

栄養輸送用の管が複雑に走るウリクラゲ

類のトレードマークである櫛板を波のように打たせて、光を浴びると虹色に輝き、悠然と泳ぐ。こんな運動器官では速力も出ないが、餌のクラゲを食べる瞬間は驚くほど機敏に動くから面白い。他のクラゲの速力も高が知れているが、いったん接触したら、もう決して逃さないよう猛さを持っている。素早く体を曲げて、がま口のよつに口を開き、パクリとのみ込む。画像では右ががま口だ。

ウリクラゲは日本中どこでも見られる普通種で、雌雄同体はクシクラゲ類共通の性質である。自家受精で自分自身の卵と精子を結合することはない。卵はハート形卵割をして小さな幼体に成長する。

高校の教科書でおなじみのモザイク卵であり、卵割中の卵をいくつかに切り分けると、各部分から誕生する幼体は、親の一部分にしかならない。すでに卵割の初期段階からそれぞれどの部分になるか決まっているからだ。

(京都大学准教授)